ヴォワチュールが語る1638年のイタリア

田 島 俊 郎

L'Italie de 1638 vue par Vincent Voiture

Toshiro TAJIMA

Résumé

En septembre 1638, Vincent Voiture visita l'Italie. Cet épistolier fut nommé l'ambassadeur extraordinaire de Louis XIII pour annoncer la naissance du Dauphin Louis, futur Louis XIV, auprès du Grand duc de Toscane.

Au cours de ce voyage, il nous a laissé une dizaine de lettres. Il y raconte, avec une plume légère, son voyage, les gens et les choses vus. Nous y entrevoyons les relations intellectuelles et sentimentales des gens de lettres de l'époque; nous trouvons Jean Chapelain, premier secrétaire de l'Académie-Française, Jean Guez de Balzac, autorité de la prose élégante et éloquente de l'époque, Pierre de Costar, érudit, Tallemant des Réaux, futur mémorialiste etc.

はじめに

フランスの文芸サロンの嚆矢であるランブイエ邸の女主人カトリーヌ・ド・ランブイエ (Catherine de Rambouillet) は建築にも造詣が深く、1616年前後にサン・トマ・デュ・ルーヴル街の自邸を建て替える際、自ら設計した。タルマン・デ・レオ (Gédéon Tallemant des Réaux) はランブイエ夫人の建築の才についてこう述べる。「あらゆる物事において器用な人である。自らランブイエ邸の設計を手がけた。(中略)建物を見るとその平面図を描けた。こういったわけで、ヴォワチュールが見た美しい建物の何も全く覚えていないと非難することになるのである。これがヴァレンティーノ宮に関してヴォワチュール (Vincent Voiture) が書き送ったあの見事なおふざけのもとになったものである。」(*Historiettes,* I, p.443.)[1]ランブイエ邸は狭い敷地を有効に使うために当時としては斬新に、建物の端に階段を置いた。この様式はマリー・ド・メディシス(Marie de Médicis)がリュクサンブール宮を建てるときに参考にしたという。また寝室の壁紙に当時の寝室の通常の色である赤と金色ではなく青を使っており、「青い部屋」(シャンブル・ブルー) と呼ばれたのは有名な話[2]。さて、この引用に見るヴァレンティーノ宮についてのおふざけとは、1638年10月7日付けのジェノヴァからランブイエ侯爵夫人あての手紙への言及である。

> 拝啓　奥様、あなた様のためにわたしが他のことにはこれまで費やしたことが決してないほどの注意を込めてヴァレンティーノ宮を見て参りました。それにその様子を知らせるようにとあなた様がお望みになったのですから、可能な限り手短にやるつもりです。ですがわたしがこのお遣いとローマで (するように) 与えられたもう一件をやり遂げたときには、わたしはあなた様のために、わたしにとって最も困難な二つを、建物について話すということと、仕事について話すということですが、やり遂げたとご考慮下さいますように。ヴァレンティーノ宮と申しますのは、何しろヴァレンティーノですから、トリノの町の4分の1マイルほど離れた、野原の中、

---

1) 原文訳を引用する際は、引用文の直後に引用箇所を明示する。要約した箇所は注で要約箇所を明示する。研究書などについては注で示す。
また主要な登場人物名については原綴りを最初に添え、以後カタカナで表記する。副次的な人物については原綴りのみで表記する。地名はイタリアの地名についてはイタリア語風の読み方をカタカナで表記する。特に原綴りは添えない。

2) *Historiettes*, I, p.443., Picard. p.29.

ポー川のほとりにある家です。近づいていきますと、最初に見えて参りましたのは、なんと申しましょうか、最初に見えたものがなんだかわかったら死んでもよい気分です。多分階段（ペロン）だと思います。いやいや柱廊（ポルティコ）ではと思います。それは間違いで、やはりペロンです。正直に言って、ペロンとポルティコの区別が付きません。ほんの1時間足らず前には、それらすべてをきちんと把握していたのですが、記憶力が欠けているのです。帰国の暁にはもっとよく調べておいてもっと几帳面にレポートいたします。(Ubicini, I, p.315.)[3]

ヴォワチュールの書簡は本人のみにあてられたものではなく、サロンで朗読されていたのだから、この書簡もランブイエ夫人以外に鑑賞され、評価されていた。逸話記録者としてのタルマン・デ・レオが説明を付さずに書いているのだから、この書簡は単に一時的に読まれただけでなく、文芸愛好家の間では周知のものであったのだろう。

この書簡は評価が別れていた。タルマン・デ・レオはこの書簡についての評価を二つ伝えている。一つは上に述べたランブイエ夫人に関する逸話で、もう一点はBoisrobertに関する逸話の中で、コスタール（Piere de Costar)がほめていること、GiracやMondory神父が下手な喜劇役者のようだとみなしていることなどを、伝えている[4]。ランブイエ夫人からこのような難題を押しつけら

3）現在のcastello del Valentinoは、1688年に建てられたものでヴォワチュールが見たものではない。

4）*Historiettes*, I, p.413.

われわれの記録を再構成するための資料の一つである『ヴォワチュール氏とコスタール氏の対話』(*Les Entretiens de Monsieur de Voiture et de Monsieur de Costar,* Paris, Augustin Courbé, 1655）の成立事情と、その著者であるコスタールについて紹介する。

Pierre Costarは1603年パリのPont de Notre-Dameの数珠屋の息子として生まれた。Pont de Notre-Dameは当時、ヴェネチアのリアルト橋のように両側に商店が並んでいた。ラテン語、ギリシア語、イタリア語、スペイン語に堪能で、その才能を見込まれて、後にLe Mansの司教になるLavardinの家庭教師に採用される。Lavardinに従ってLe Mansに赴き、その地で1660年に亡くなる。同性愛や無神論者とされることもあり、ことに無神論を教え子のLe Mans司教に伝えたと非難された。

文筆活動は1634年にシャプランへの非難を書くことから始めている。シャプランがリシュリューに捧げた頌歌への厳しい批評を流通させている。ゲ・ド・バルザックはそれまでコスタールと親密な関係を結んでいたが、シャプランの側に立つ。コスタールはシャプランやバルザックとの敵対関係にバランスをとるためにヴォワチュールに近づいた。ただタルマン・デ・レオが伝えるところによると1638年6月に次のような状況でシャプランと和解している。ある日シャプランがヴォワチュールと一緒にいたとき、コスタールが訪れる。コスタールはシャプランと面識がなく、シャプランはコスタールを見知っていたのだが、そのそぶりを見せないまま、彼らは長いこと話し合った。「ついにシャプランが立ち去り、快い会話だったと思ったコスタールはヴォワチュールに、今のは誰だったのか尋ねた。「あれこそは君があれほどごりごりと痛めつけた例の人、シャプラン氏さ」。コスタールはあれほど高潔な人物を怒らせたのか絶望した素振りをし、シャプランが自分を許すようにしてくれ、あれはdelicta juventutis（若気の過ち）であったのだとヴォワチュールに頼んだ。（中略）

れるのは初めてではない。書簡に言及されている例としては、1629年9月、当時はナンシーから書簡でStrozzi元帥の墓を描写している[5]。自らの無能を嗤いながらもランブイエ夫人の難題を嘆く。おふざけを込めてなれなれしく語りかけるヴォワチュールお得意の書簡の技術についてはすでに論じている[6]。なぜヴォワチュールはこの時期トリノにいるのか。1638年9月から年末にかけてのイタリア道中の顚末を追ってみたい。

たびだち

ヴォワチュールはたびたび旅をしたが、1638年の旅は国事である。滑稽で軽い書簡や詩作品を好んで書いた人物ではあるが、何故か権力者たちの信頼も得ていた。直接の主人であるガストン・ドルレアン (Gaston d'Orléans) は当然としても、1638年にはリシュリュー (Richelieu) の意を承けてフィレンツェへ旅立つ。

ヴォワチュールは骨を折り、シャプランはこの諍いを和らげ、人々に噂をさせ続けないようにとこの和解を受け入れた。コスタールはそれから会いに行き、その前で跪いた。シャプランはこの滑稽な服従を恥じ顔を背けた。すると「嗚呼、わたしの姿をご覧ください」。あたかも両の目に蛇口でもついているかのごとく即座に大量の涙を流し始めたのだから、この人物は結構な役者だったというわけだ。」(*Historiettes*, II, p. 294.) もっとも和解は表面的なもので、火種は残っていた。シャプランはコスタールをランブイエ邸への出入りを禁止させるという成果を得ている。

ヴォワチュールの死後、『作品集』(*Les Œuvres de Monsieur de Voiture*, Paris, Augustin Courbé, 1650, in-quatro, 印刷は1649年8月17日)が、Martin Pinchêneによって出版され、成功をおさめた。アングレームの下級裁判所参事のPaul Thomas de Giracは、その批評をBalzacにあててラテン語で書いた。世論はバルザックがこのライバル批判をGiracに吹き込んだのだと確信していた。そこでコスタールが介入し、1653年に『ヴォワチュール氏の作品擁護論』(*La défense des ouvrages de M. de Voiture*) を出版した。『擁護論』はいたくバルザックを傷つけた。Giracはフランス語で書いた作品で自分の論文を擁護した。コスタールは1655年に『ヴォワチュール氏とコスタール氏の対話』を出版、また『続・ヴォワチュール氏の作品擁護論』(*Suite de la défense*) でGiracに答えた。Adamによるとこの論争自体は他愛のないものとしか見えなかっただろうが、その背後にシャプランとコンラールがバルザックの側につき、コスタールの背後にはMènageやLa Ménardièreが窺えた。(*Historiettes*, II, p.962. note par Adam, et Adam, *Histoire de la littérature française du XVIIe siècle*, tome II, p.174-175.) したがって、コスタールが褒め、Giracがけなすのは当然のこと、なのではあるが。

5) Ubicini, I, p.35.

6) 拙論「ヴォワチュールの詩の猥褻さとパロディ」参照。

さて、1630年代、フランスは世継ぎのいない状態がしばらく続いていた。ルイ13世（Louis XIII）がアンヌ・ドートリッシュ（Anne d'Autriche）と結婚してすでに久しい[7]。王に子どもがいるかどうかは国家的な問題である。結婚の第一の目的は世継ぎを作ることである。ルイ13世の結婚の成果はなかなか実らない。国王ルイ13世とアンヌ・ドートリッシュはすでに結婚後22年、世継ぎが生まれる希望は失われつつあった。世継ぎのいない国王などはぶどう酒のないフランスのようなものだ。王太子が生まれない状況は王位継承権第1位にある王弟殿下ガストン・ドルレアンをますます陰謀へと駆り立てる。ヴォワチュールはガストン・ドルレアンに仕えていたため、時に国家の反逆者の一味としてパリとランブイエ邸を離れなければならなくなる。ガストンが荷担した、もしくは荷担したと目された事件の内二つについてはすでに書いた[8]。1638年の9月には大手をふってフランスから国外に出ることになる。思いがけないことが二つ重なったのである。

一つは国事に関わる。世継ぎが生まれる希望が失われつつあった国王夫妻だが、1637年12月始め、思いがけず一夜を共にし、アンヌ・ドートリッシュはめでたく懐妊。

当時の証言者 Monglat によると「12月の初め、王妃はパリに、王はヴェルサイユにいたのだが、Sant-Maur に休むために出発した。パリを通り、La Fayette 嬢に逢うために Saint-Antoine 街の Filles de Sainte-Marie に立ち寄った。まさに出発しようというときになって大雨と激しい風に見舞われ、道中はすっかり濡れそぼってしまい、人も馬も進めぬほどであった。さらにたいそう暗くなり、松明も火をかき消す激しい雨のために灯すことはできなかった。この出来事は王を非常に当惑させた、というのは王の寝室もベッドも配膳係も Saint-Maur にあったからである。天候が変わるか見るために長く待った。しかしこの洪水が過ぎ去らないのを見越したので、焦り始めた。ルーブルには用意された寝室もなければ、夜食を用意する係りもいないといったものだから、連隊士官

7）ルイ13世とマリー・ド・メディシスの結婚は1615年11月25日。夫婦共に14歳。現実の結婚はそれよりやや遅れたに違いない。タルマン・デ・レオは結婚当初のルイ13世の言動をこう伝えている。「ルイ13世は幼くして結婚した。結婚の際、初夜の床に向かいながら「体の中にションベンして来るぞ」などと言った。」（*Historiettes*, I, p.333.）

8）拙論、「ヴォワチュールのスペインアフリカ旅行」、「ヴォワチュールとタルマン・デ・レオによるサン・マール事件」

のGuitaut、この人は王に対して非常に気安かったのだが、王妃に一宿一飯を求めるために使いを送られたらと進言した。王は、意に反する提案であったのでそれを却下し、天候が変わる望みに固執していた。しかし嵐は弱まるどころか強まるを見てGuitautはさらに拒絶されることを怖れずに同じ提案をし、今回は前よりも好意的に受け止められた。王は、王妃が自分のために夜食をとり、やすむのが遅くなるではないか、とだけ言った。しかしGuitautは、王妃は王の時間に合わせられましょうと断言し、陛下がその理屈に納得したため、王妃に先触れし、王が夜食に長く待つことがないようにと先に急いだ。王妃はこの知らせを予想していなかっただけにことのほか喜んで迎えられた。そして王が早めに食事をとられるように命じ、二人は共寝された。そしてこの晩王妃は王太子、後の王ルイ14世を妊娠されたのである。王太子がこの偉大な王妃の数々の不幸に終止符を打つことになり、この王妃を後日これまでどの王妃もたどり着いたことのない栄誉と栄光のもっとも高い位置に据えることになるのである。」もっともこの証言は真実ではない[9]。ただアンヌ・ドートリッシュはめでたく懐妊したのは事実であって、翌1638年9月5日に、王太子、後のルイ14世を出産する。長い不妊の後の妊娠は憶測を生んだ。タルマン・デ・レオはリシュリューがアンヌ・ドートリッシュに病弱なルイ13世の代役を果たすことを提案した、という説を伝えている。またルイの出生当時「彼の父、フランスの王様は／毎日毎日祈ってた／女王様にお子さまを／あっちの聖人こっちの聖女／枢機卿もお願いし／こっちが巧くいったとさ」の戯れ歌が歌われたという[10]。

さらにヴォワチュールにとって思いがけないことに、王太子の誕生を伝えるためフィレンツェに派遣される大使に、ヴォワチュール自身が任命されたことである。1638年9月のコスタールあての書簡の中で思いがけない任命の驚きを伝える。

---

9) cité par Bertière, p.352-353. Bertièreによると、公式記録による王の足取りとは矛盾するため否定されている。

10) *Historiettes*, I, p.236-237. et notes.参照。
原文は以下の通り。
Son père, le roi des Français/Tous les jours faisait des souhaits/Pour que la reine fût enceinte/Il priait les saintes et les saintes/Le cardinal priait aussi/Il a beaucoup réussi!
"Couplet chanté à la naissance de Louis XIV" cité dans *Chronique de la France et des Français*, p.476.

サン＝ジェルマン（アン・レイ）への旅を引き起こしたのは、王妃の出産を大公に伝えるためにフィレンツェへの旅を王が命じるということでした。このお役目はわたしにとってはいささか好都合で、というか心地良いものでもあります。しかし、この旅がしばらくの間わたしからあなたの手紙、いやあなたご自身を拝見する、というのはわたしが戻る前にあなたはパリにいらっしゃるでしょうから、そういった手段を奪うことになるということには憤っております。あなたがこの手紙に返事をくださるときにまだパリにいるかどうかはわかりません。しかしわたしに返事をくださることを後回しにされませんように、というのはわたしの出立を遅らせる、または妨げるいろんなことが起こりうるのですから。いずれにせよおいとまを申し上げます。(Ubicini, II, p.89., *Entretiens*, p.82.)

パリの人士との別れはつらいが、国庫からは支度金を支給され、またフランス国王の使臣であればトスカナ大公からそれなりの小遣いももらえそうなものであり、この旅は「好都合で、心地良い」に違いない。賭け好きのヴォワチュールの懐具合は豊かなものではなかったらしい。これより半年ほど前ヴォワチュールと同じくランブイエ邸に出入りする文人で、膨大な書簡を残したシャプラン（Jean Chapelain）は1638年3月7日付けのゲ・ド・バルザック(Guez de Balzac）あて書簡でヴォワチュールのだらしのない生活について批評している。

哀れなヴォワチュールに関しては、この人物は賭事においても怠け者で、賭場（アカデミー）に通う習慣もなくしています。もちろんそこで彼に（お金を）受け取らせることがもはやないということで、賽子壷もその霊験をGaletの奔放さと同じような移り気であしらったということです。わたしは、あれほどに才能のある人物がかくも軽率に運命と関わり、友人すべての意に反して不幸になりたがったことに憤慨しています。今は王弟殿下のお屋敷で外国大使の先導者と王弟妃の執事の職で得ている給金で生きています。年間およそ4千フランになるということですが、今はそうではないだろうと思います。この件はご内聞に。(Chapelain, I, p.208.)

この中で言及されるGaletは資産家で、現在Sully館の名で知られるマレー地区の建物を建てた人物。建物の完成を待たずに破産、建物は1634年シュリーの手に帰した[11)]。

さて1638年9月に戻ると、コスタールには続けて手紙で急な使命を承けて準備に大童な様子を述べる。

拝啓、わたしがフランス貨を買い、カスティリア語やポルトガル語で恋文を書かなければならなかったときも、今ほど仕事はありませんでした。国王陛下、王弟殿下からお暇をいただき、Bullion氏[12)]に支払い命令書をお願いし、国庫から支払いを受け、友人たちに別れを告げなければなりません。しかもそれはたった三日でやり遂げられなければならないのです。でもあなたへの手紙を書くためにそれらを放っておきます。(異文「ほうり出さない用件など何もありません。」*Entretien*)。というのは、わたしにはこれほど重要な用件などないように思えますし、わたしがあなたにいとまを告げることなしに出かけるという具合に幸先悪く始めたりすれば、この旅行がわたしにとって幸運なものとなりうるはずがないのです。この船(embarcacion)がわたしにとって幸運なものかどうかは知りません。でもこれほど望んでフランスから出たことはありませんし、かつて大西洋上で立ち向かった32(方向)の風に、地中海上で立ち向かうことを楽しみにしているのです。(中略)

ところで、あなたの方位儀とあなたのVégasの海峡によって立派な船頭を勤められたあなたが、風の数を35にしてらっしゃいましたね。「嗚呼、何故に天はかくも風を乱すか? (Heu quianam tanti turbarunt aethera venti.)」

---

11) *Historiettes*, II, p.751. et notes.

12) Claude de Bullionは当時の大蔵卿。Monglatが伝えるによると、「ある時ルイ13世が財務状態の報告を受け、その浪費ぶりへの驚きをBullionに伝えると、この人物は、自分があずかり知らぬ三つの穴がある、それは砲兵、海軍、枢機卿です、と答えた」(cité par Adam, *Historiettes,* I, p.973.)と伝える。砲兵は枢機卿のものであり、海軍も(リシュリューの甥の)La Meilleraye のものであるから、結局いずれもリシュリューによる消費である。Bullionからordonnanceを得て、Trésor de l'Epargneから支払いを受けて支度を整えるわけである。使臣は主人の豊かさを誇示するためには自らも豪華に装わなければならなかったはずで、さらに派遣先での下賜金を考えれば少々自腹を切っても大丈夫だったはずである。宰相が国費を私しているのだから、にわか外交官が公金を私的に流用するのは、当然か。Bullionのライバルは後にフーケと財務総監の職をわけ持つServienだったのだが、ServienとBullionとのいさかいで追放中。Serivenの甥で、ルイ14世の外務卿をつとめることになるLyonneとローマで会うことになる。Lyonneについては、あとで述べる。

世界を経巡る者たちはその数を32しか知らず、余分な三つはあなたの想像の産物でしかないのです。そんなにあるとは思っておりませんでした。しかしあなたの中で最も耐え難く思えるもの、それはギリシアの風です。どこに重アクセントを置くか曲アクセントを置くかわたしより良く知っているがためにお見せになる尊大さなのです。昔から言われております「イオタを足しても引いてもいけない。」でもアクセント記号について言われているわけではありません。でもわたしが一つ忘れてしまったものですから、あなたは大勝利をおさめでもしたかのように吹かれました「嗚呼恐ろしき風よ（o ventum horribilem)」。あなたが哀れなピロメラとあんなにまずく折り合われ、テレウス以後、あなた以外の誰も彼女をあんなに手荒に扱ったものはいなかったとき、わたしは大騒ぎはしませんでした。そのことはわたしに対してよりもあなたにとって容赦さるべき事柄なのです。(中略)

本当のことを申しますと、わたしがこの地を去るにおよんで最も惜しんでいることは、あなたの近況をもう聞けないということなのです。イチジクもブドウも、メロンも、そして（メディチ）大公がわたしに下さるプレゼントも、あなたの手紙を欠くという喪失を補いはしないのです。(後略)
(Ubicini, II, p.89., *Entretiens*, p.85., 日付はUbicini版による、*Entretiens* は日付を示していない。かっこに示したように若干の異同がある。)

冒頭の原文は「quand j'avais des moutons à acheter et à écrire des poulets である。mouton は Furetière によると1357年に鋳造されたフランス金貨。片面に洗礼者ヨハネの、もう一面には羊と Ecce Agnes Dai と刻印されていたという。poulet は恋文。比喩を原義の通り訳すと、「わたしが羊を買い、若鶏を書かなければならなかったとき」となる。往復書簡としては当然のことなのだが、*Entretiens* の中では比喩が継続して使われる。この羊や若鶏の喩えや羅針盤に示される風の方位の数についての話題は、この前後のコスタールの書簡でも繰り返される。したがって当然のことながら文脈を無視しては意味をなさない。カスティリアやポルトガルの語、embarcacion というスペイン語からもわかるように、1632年のモンモランシーの乱後の混乱によるスペイン滞在への言及で始まる。より具体的には1633年10月のポーレ嬢への書簡を参照している。その中には embarcacion や32（方向）の風への言及が見られる[13]。ヴォワチュール

13) 拙論「ヴォワチュールのスペイン、アフリカ旅行」参照。

は当然としても、コスタールもこの5年前の第三者あての書簡の写しを座右においていたのだろう。

Voitureは、1632年当時もマドリッドで大使(代理)の職にあった。もっとも国王ではなく王弟ガストンの大使であり、しかも主人自身がブリュッセルに亡命中の身では晴れがましい立場ではなかった。

Végasの海峡はすでに*Entretiens*の中で話題になっており、コスタールが編集してつけてくれた注で、われわれにはプリニウスへ言及だと知れるのだが[14]、唐突に引かれた未詳の固有名詞にはヴォワチュールも「(あなたが引用された)クイントゥス・メテルス・ケレルなるお方は存じ上げません」(Ubicini, II, p.85., *Entretiens*, p.37.) といささか苛ついた文面である。

ピロメラ (Philomèle) はギリシア神話の人物でアテナイの王Pandionの娘。オウィディウスによれば、トラキアの王であり姉プロクネ (Procne) の夫でもあるテレウス (Térée) に暴行され、そのことを他言しないように舌を切られた。ピロメラは姉のプロクネに刺繍で事件を伝えた。テレウス夫婦には息子が一人いた。ピロメラの復讐を果たすために、プロクネは自分の息子を殺し、テレウスに食べさせた。絶望し怒ったテレウスに追い詰められた二人は神に救われ、ピロメラはひばりにプロクネは燕にかえられた。テレウスもやつがしらに変えられた。La Fontaineもイソップに取材して*Philomèle et Progné* (Livre troisième, fable XV)を書いている[15]。ここでは注4で述べたシャプラン達との

---

14) *Entretiens*, p.31.

コスタールはPline, Lib 2, hist. cap. 170(?)という注記を付している。プリニウスの『博物誌』第2巻の170には確かに引用された人名など、関連する記述がある。「さらにネポスは北方の巡回について、アフリカヌスと同役であったクイントゥス・メテルス・ケレルがガリアの総督であったとき、スエビ人の王から数人のインド人の贈物をもらったが、それらインド人は暴風によって進路から逸らされてゲルマニアに着いたのだと、記録している。このようにどちら側にも大地を取り巻く海があって大地を二分し、われわれから世界の半分を奪っているのだ。というのは、そちらからこちらへ、またこちらからそちらへ行ける地域がないのだから。このような考察は人間の空しさを暴露するのに役立つし、わたしには、人々がそれぞれ満足しないでいる果てしもなく広大な地域を、まざまざと描いてみせることを要求するかのように思われる。」(プリニウス、中野定雄訳、『プリニウスの博物誌』第1巻、雄山閣出版社、1995年 (第5版))

15) Ovidiusの VI, v.412-674参照。オウィディウス、中村善也訳、『変身物語』、岩波文庫、1981年。なおこのテーマは17世紀にはラ＝フォンテーヌ他多く詩の題材となっている。La Fontaine, p.1104-1105.

いさかいについての当てこすりか。

しかしそれよりわれわれの興味を引くのはラテン語・ギリシア語を自由に使いこなすコスタールに対していささか辟易の態のヴォワチュールの文面である。*Entretiens* とはいいながら自分の知識の及ばない方面でうんちくを傾けるコスタールにはヴォワチュールもシャプランに同情的なように思えてしまう。

相手との別離を嘆くことで手紙を締めくくる。手紙を受け取れないことは、イタリアの果物のような楽しみでも補えないと嘆く。この誇張法のために引かれたイタリアの果物のリストの末尾にはメディチ大公からの下賜品を挙げる。われわれはこのレトリックの向こう側に、メディチ大公からの下賜品が楽しみだ、というのがヴォワチュールの本音と見ることも許されるだろうか。

トリノへ

出発の正確な日付けはわからない。途中ロアンヌに足を休めているので、馬車でパリから南下し、ヌヴェール、ディゴワン、ロアンヌとロワール河沿いを南下、ローヌ渓谷に出てリヨンに入り、シャンベリからモンスニ峠を越えてトリノに入ったのだろう。この旅行の手段、経路は言明されていないが、翌1639年の夏にもヴォワチュールはグルノーブルを訪れており、その際はパリからグルノーブルまで、馬車で6日間で移動したと述べている[16]。トリノに寄るのは、ルイ13世の妹であるサヴォイア公妃クレティエンヌ（Chrestienne de France）にルイ13世の言付けを伝えるためである。

ピエモンテのサヴォイア公国は1601年以前はブルゴーニュ地方のブレスやジェックスを領して現在のフランスとイタリアの双方にまたがっていた。16世紀末のサヴォイア公カルロ＝エマヌエーレ1世（Charles-Emmanuel I）は宗教戦争期、新教のジュネーブや、ユグノーに寛容なアンリ4世に抗して旧教徒を支援したが、いずれも破れ、1601年のリヨン条約では、ブレスやジェックスをフランスへ割譲し、1603年サン・ジュリアンの和議でジュネーヴの独立を容認した。1619年2月1日ヴィットーレ＝アメデ（Victor-Amédée）とルイ13世の妹クレティエンヌとの結婚でサヴォイアは一層フランスの影響下に入る。タルマン・デ・レオは色好みのサヴォイア公が嫁に言い寄った、という逸話を伝えている[17]。サヴォイア公が1637年に亡くなると公妃クレティエンヌが幼い長子フ

16）Ubicini, II, p.93. *Entretiens*, p.111.
17）*Historiettes*, I, p.63.

ランチェスコ＝イアキントの摂政を務めていた。ヴォワチュール一行は9月29日にトリノに到着し、ランブイエ嬢あて9月30日付の手紙で旅の様子を報告している。

拝啓　わたしはトリノに到着したとはとても申し上げられません。というのはわたしの半分しか到着していないからです。もう半分はあなたの傍に留まっていると言いたいのだとはお思いになりませんように。そうではなく、パリを出発するときには104リーヴルあったのに、今は52リーヴルしかないのです。わたしほど痩せて肉の落ちているものは何もないでしょう。わたしが変わってしまったことから、ピザニ侯爵とわたしが会うときにはもはや互いがわからないでしょう。熱でロアンヌに1日留まらねばなりませんでした。わたしはしっかり陥ってしまってしまって、長いこと病気に倒れることになるのかと全く思っていました。もっともわたしを悔しがらせたのは、これがあなたから離れたためなのだとお思いにならず、むしろ急ぎに急いだからだとお考えになると想像したことです。実際はずれていないこともありません。さらにこの考えを補強するように思えることは、わたしが乗った最後の3頭の馬は、ブリュネルがマルフィーズに見せたことをご存じのわたしの例の部分を哀れな状態にしてしまったことであり、もっと怖れるべきことは、わたしは大した炎熱にさらされましたので、万一王太子の養育係にさせられでもしたとするならば、最初の4日間そうであったほどにはわたしは清潔ではなかったのではということです。ロアンヌでとある紳士にそれを話しました、彼は薬剤師なのだそうですが、すっかり苦痛をやわらげるものをくれました。このことを公爵夫人（原注、エギヨン、コンバレ夫人）におっしゃってくださいますように。それ以来あなたにお目にかかれないということ以外には苦痛はありません。でもこの苦痛には薬はありませんし、水銀塩でも何もなりません。昨日の午後からこちらに到着しております。まだ公妃殿下にはお目にかかれません、というのは昨日サヴォワ氏が亡くなろうとしていると思われていたからです。今日お目にかかれるでしょう。あすは軍隊に出掛けるために出発するでしょう。明後日にはラ・ヴァレット枢機卿猊下と弟君にお目にかかれると期待しています。このような機会にとても喜んでいることをお許しください、またあなたのいらっしゃらないときにこの喜び感じやすくなっていることを悪くお取りになりませんように。あなたのいらっしゃらないとき、と言う時には、大公妃殿下、ブルボン嬢エギヨン公爵夫人、サブレ侯爵夫人ヴ

ィジャン夫人そして母上様、大公妃や侯爵夫人などがいらっしゃる中でも最初に名を挙げるべきであった母上様も含んでいます。リアンクール夫人のご病気をわたしがどんなに苦にしているかおわかりになれないでしょう。もしあの方がお元気になられ、お（脚）が治られたらローマでわたしにお知らせくださいますようお願いします。というのはそれがローマでわたしがもっと平穏に楽しくどんなことでもしたり見たりできる原因になるでしょうから。でもどれほど大きな喜びでしょう、もしここであなたに申し上げることができれば。どれほどわたしがあたなの、云々。」(Ubicini, I. p.311.)

別離の悲しみを伝える誇張を予想させる書き出しを自ら諧謔の種にする軽やかな書き出しである。旅立って4日ほどで熱と下痢に見舞われたか、途中のロアンヌで休む。ブリュネルとマルフィーズの名は、マテオ・マリア・ボイアルド（Matteo Maria Boiardo）の『オルランド恋情』(l'Orlando innamorato) に取材したフランチェスコ・ベルニ（Francesco Berni）のスタンザからの引用。ブリュネルがマルフィーズに見せたのはお尻である。馬車に揺られて臀部がすれてしまったのか、それとも下痢によるか[18)]。

ただしこの時期サヴォイア公妃の長子でありサヴォイア公である6歳のフランチェスコ＝イアキントが病気で、公妃にはすぐには会えなかった。サヴォイア公フランチェスコは間もなく亡くなり、弟のカルロ＝エマヌエーレ2世 (Charles-Emmanuel II) がザヴォイア公となり、公妃が続けて摂政を務める。ヴォワチュールはそれより前、公妃に面会を果たし、10月初めにはラヴァレット枢機卿（La Valette)、ランブイエ嬢の弟ピザニ侯（Pisani）にあうためにトリノを去る。トリノでの行動については先に訳出したヴァレンティーノ宮の描写以外に詳細なものはない。ただ数年後シャヴィニィあて書簡の中でトリノの滞在は退屈だったと述べている。

---

18) 『世界文学大事典』、集英社、1997　岩倉・清水・西本・米川『イタリア文学史』、東京大学出版会、1985参照）ラ・フォンテーヌも Le Remède というエロチックなコントの中でこの形容を使っている。Pléiade 版の注で Collinet が引く Berni の原文は以下の通り。"Tal volta i panni in capo si levava,/ E squadernava (intendentemi bene),/ Con riverenzia, il fondo dele rene" ("Parfois, ses vêtements se soulevaient bien haut et lui effeuillaient — comprenez-moi bien — sauf votre respect, le bas des reins"「時に、彼女の服は高く捲れ上がり、葉を散らすのです、お解りの通り、失礼ながら、腰の下の方の。」). La Fontaine, p.1498.)

「あれほどにイタリアから出たいと思っていた後に、トリノでうんざりしていたおり以上にパリでうんざりしています。(中略)さらに一言でご理解いただけるように申し上げますと、あなた様と毎日半時間お目にかかれる栄誉を得るために、毎晩4時間でも［公女（サヴォイア公妃)］様と話のお相手をすることに同意していることでしょう。(後略)」(Ubicini, I, p. 393.)[19]

また、公妃との面談の様子は伝えていないが、後日（1640年10月14日）パリからトリノ滞在の礼状を送っている。またサヴォイア公妃のお付きのセルヴァン嬢と仲良くなったようで、同時に礼状を一通送っている[20]。

トリノからフィレツェへは海路をとるが、その前にイタリア方面軍に従軍中のラ・ヴァレット枢機卿やピザニ侯を慰問している。ランブイエ邸にとっては重要なニュースのはずなのだが、ヴォワチュールはラ・ヴァレットやピザニ侯の様子は書き残していない。スペイン軍陣地の近くを通ってのアペニン山中を通って、海岸の町サヴォーナへ出、船便でジェノヴァへ向かう。10月7日、ジェノヴァからランブイエ嬢あてにアペニン山中の冒険を愉快に伝える。

拝啓　わたしの今日の状態をあなたが鏡でご覧になれたらなと思います。あなたはもっとも恐ろしい山のただ中にいるわたしをご覧になったでしょう。12人から15人ほどのみるもおぞましい男たち、そのもっとも無垢な者でさえ15や20の人殺しはしていて、悪魔のように真っ黒で、体の半分の長さくらいに髪をのばし、顔には2～3の切り傷、肩には鉄砲、帯にはピストル2挺に匕首2本、こういった男たちに囲まれて、彼らはピエモンテと

19) この書簡については名指しされたサヴォイア公妃の妹に当たるイギリス王妃 Henriette de France からクレームが付いている。タルマン・デ・レオによれば、ヴォワチュールの初版を編集した甥のパンシェーヌが多くの固有名詞を削除してアステリスクで置き換えたことを非難しながら、といいながらパンシェーヌの検閲は必ずしも一貫していないと指摘する。さらにアステリスクに置き換えても充分に曖昧になってはいない点があることも指摘し、「イギリス王妃はモントジエ夫人に、サヴォイア公妃にヴォワチュールを一冊送りたいが、そこに含まれたシャヴィニーへの3時間サヴォイア公妃の相手をする方がましだ、と書いている手紙を削除したい、ただもうすでに送られているだろうから」と述べた。*Historiettes*, I, p.499.

20) Ubicini, I. p.349-352.

ジェノヴァの境にある山の中に暮らす山賊たちです。これらの面々の中にいるのをご覧になって心配されたことでしょう。また彼らがわたしの喉をかっ切ろうとしているとお思いになったでしょう。追剝ぎにあうのを怖れてわたしは彼らを同行させたのです。昨夜から彼らの首領にわたしに同行するよう、わたしの道中に落ち合うよう手紙を書き、彼はそうして、わたしは3ピストールですんだ訳です。でもことに、わたしが屠殺場へ連れていくのだと思い込んでいたわたしの甥（原注、パンシェーヌ）と召使の顔色をご覧になっていればと思いました。彼らの手を離れて、わたしはスペイン軍守備隊のいる2里を通過しました。そこで多分もっと危険を冒したのでしょう。わたしは誰何されましたが、サヴォワ人だと称しました。そしてそう見せ掛けるために可能なかぎり［ヴォージュラ］氏のように話しました。わたしの悪いアクセントに彼らはわたしを通過させました。わたしがこんなに有益な話し方を今後するかどうか、またわたしがアカデミーの会員だからという理由で、正しいフランス語を話すことを自慢しに行くことがこんな際にいかに適切ならざることでなかったかどうか、ご覧ください。そこを出てサヴォンヌに着きました。そこでわたしたちが乗った船にとっては少しばかり荒い海に出ました。でも神のご加護で無事ここに到着しました。ほら一日の間にどれほどの危険を冒したかご覧ください。結局わたしは山賊から、スペイン人から、そして海から逃れたのです。これらはどれもわたしに苦痛を与えないのですが、あなたには与えられます。この旅行中わたしが冒した最大の危険はあなたのためなのです。わたしがからかっているとお思いでしょう、でも母上様とあなたにお目にかかれないという悲しみにもはや耐えられないならば、死んでしまいたいのです。最初はわたしも半信半疑であって、わたしを苦しめるのがあなたなのか駅馬たちなのかわからなかった、と率直に認めます。でも6日前からもう馬で走ってはいませんが、疲れが少ない訳ではありません。このことからわたしの苦痛はあなたから遠ざかっていることで、わたしの最大の疲労はあなたにお目にかからないことに疲れていることだ、とわかります。本当に、フィレンツェでの仕事（原注、ストロッツィ家の相続問題。）以外の仕事がなければここから取って返したろうと思うほどです。またローマであなたの訴訟を提起しなくて良ければこれ以上行く気力がなかったことでしょう。」（Ubicini, I. p.313-314.）

宮廷の雅なことばを収集して当時のフランス語の正しい用例とされるものを

われわれに伝えてくれるヴォージュラも、訛りの例に引き出されるとは気の毒なことである。この点に関してはタルマン・デ・レオはヴォワチュールの逸話の中で、「この哀れな本に沢山の伏せ字をつけたシャプラン氏やコンラール氏が、ここでは注意しなかったというのは驚きである。ヴォージュラ氏が非常に巧みに賞賛されている箇所では名前を伏せた彼等がである。というのはここではヴォワチュールはサヴォア人で通るようにヴォージュラ氏のように話そうとした、といっているのだから」(*Historiettes*, I, p.499.) と、この書簡に言及しながらパンシェーヌの編集方針の無定見さを批判する。同じくサヴォア公妃の伏せ字の件については、上の注19参照。

ジェノヴァからもさらに海路を続けリヴォルノからフィレンツェへ。旅行の本来の目的はトスカナ公に王太子ルイの誕生を伝えることなのだから、フィレンツェがこの旅行の第一の目的地なのだが、フィレンツェでの様子はランブイエ家には伝えていない。辛うじてコスタールにあててフィレンツェでの待遇の豪華さについて11月15日付の書簡でローマから伝えている[21)]。

> 拝啓　昨日はこの世でもっとも美しい宮殿に宿を取っておりました。わたしのアパルトマンとしては大きな一部屋と、二つの供部屋と、金糸の格調高い壁掛けで飾られた寝室を使っておりました。さらに20から30人ほどの召し使いに仕えられておりました。(Ubicini, I, p.318.)

もっともフィレンツェの宿舎の豪華さはローマの宿舎の貧弱さを引き合いに出すために引かれていて、具体的ではない。この手紙でもわかるように、フィレンツェで任を終えるとローマまで足を延ばす。

---

21) Magne は、Ubicini がこの書簡を1638年12月15日付けとしているのは11月15日付けの間違い、としている (Magne, p.136. note 1.)。確かに書簡の中で、ローマを3週間後に出発するつもりだと書いており、またヴォワチュールは1639年の1月初めにはパリに戻っているのだから、Magne の指摘はもっともである。ただいずれも簡単な見落としである。Ubicini はこの書簡を第1巻の318ページと第2巻の91ページに載せており、第2巻には最初の1行のみを載せ、注で第1巻の318ページに送っている。この2箇所にある同じ書簡の日付を、第1巻では12月15日付、第2巻では11月15日としている。多分第1巻の12月15日付が誤植。書簡の全文はこの「誤植」を含む第1巻のみにあるため、Magne は第1巻の誤植を見て Ubicini の校訂ミスと考えたのだろう。

ローマへ

ジェノヴァからの手紙に見るように、ヴォワチュール本人としてはローマまで足を延ばしたかったわけではない。しかしランブイエ夫人の実家ストロッツィ家の遺産問題で訴訟代理という重要な任も負っていたので途中で引き返すことはできなかった。もっとも、ローマでの仕事についてもヴォワチュールの手による報告はない。ヴォワチュールの書簡がサロンで読み上げられたり回し読みされたりしていたという事情を考えれば、私的であれ公的であれ、重要な仕事は手紙では知らされなかったか、親展として一般の目に触れないまま失われたのだろう。ローマからの手紙は2通残されている。1通は先に引いたフィレンツェの宿舎の豪華さに比べてローマの宿舎の貧弱さを述べる11月15日付けのコスタールあて。もう1通は11月29日付けのランブイエ嬢あてである。ローマはランブイエ夫人の故郷なのだが、この手紙もコスタールあてと同じくローマへの不満から始まる。ローマの遺跡や建造物のすばらしさもあなたの不在を埋め合わせはしない、とする反語によるレトリックなのだが、われわれには較べられて軽いとされる事柄のほうがむしろ興味深い。ローマの文物、人士についての描写がある。

> お母様には申し訳ありませんが、わたしはローマでほど退屈したことはありません。一日たりとして、なにか素晴らしいものや、偉大な職人たちの傑作や、この時期に春の盛りが見られる庭や、この世に並ぶもののない建造物や、そういった建造物よりさらにずっと美しい遺跡などを見ぬ日はありません。しかしここに申し上げるすべてもここでわたしが悲しんでいるということ、またこれらすべてのものを見ているこの同じ時に、ここから出たいと思うことをさまたげはしません。アッペルやプラクシテルや「パラデル」の、絵画（パンチュール）や彫刻（スキュルチュール）や「プロヴァチュール」(原注、おふざけでこれらの2語を韻を踏ませるためにおいた。前者は水牛の肉寄せ、パラデルは修道女が作る乳製品）の素晴らしい作品もわたしの趣味ではありません。わたしがその原因を承知しないとすると驚いてしまうでしょうし、あなたにお目にかかることに慣れている人物はあなたにお目にかかれれなければ決して幸せではありえない、ということをわたしが知らなかったとしても驚いてしまうでしょう。実を申しますとあなたに関しては、健康のようなことがわたしに起こりました。つまり、あなたを失った時にしかあなたの価値をよくわからなかったのです。

そして本人としては（原注、面前では（異文））あなたと共にいると、それを保とうと立派な摂生はしませんが、あなたを失ってからあなたをとても望んでいるのです。あなたがこの世でもっとも貴重なものだと認識し、あなたなしでは地上のあらゆる悦楽も苦く不快なのだと気づきました。しばらく前に、あなたとリュエルの２～３の小道を見ることで、ローマのあらゆる葡萄を見ることで得る喜びよりも、さらにカピトール（の丘）を、かつてそうであったままの状態で見ることで得る喜びよりも、カピトールのユピテル（神）その人がその場にいることよりも、多くの喜びを得たのです。わたしの言っていることが冗談ではなく、わたしは申し上げたくらいしっかり病んでいるのだとおわかりいただけるように、１週間前、朝ジャール騎士と散歩している時に、氏がわたしを抱き止めてくれなければ、まっさかさまに倒れてしまうところでした。翌日の夕方、エストレ元帥夫人（原注、エストレ元帥はローマ駐箚大使であった）のお部屋で気を失いました。医者たちはきふさぎのせいで、軽く見るべきではないと言います。わたしは二日続けてこんなことが起こり、何かもっと悪いことに脅かされているようなので、わたしはぼんやりももあわてもせず、ネルリ氏（原注、放蕩者のフィレンツェの貴族で、何をすべきかわからず賢者の石探しに手を出した。）がくれたアンチモンを服んだのです。実際効きました。エギヨン公爵夫人にお服みいただく分を４服分持って行くつもりです。だってこれほど良い効果をもたらす薬（原注、ripopée、薬を溶かし混んだワイン）はありませんし、わたしにこれをくれた人物が飲料用の金の処方箋を見つけるまで、本人は１年内にできるだろうというのですが、これを使わなければならないからです。１週間内にここから出られるように望んでいます。こんなにうんざりさせる土地にこんなに永く留まっていることに驚かれることでしょう。いずれは申し上げるつもりの、逃れることのできない理由のためにここに足止めされているのです。でも断言しますが、一生のうちこれほど憂欝で、これほどあなたにお目にかかりたいことはありません。わたしが言葉で言い表わせないくらいあなたの、云々（Ubicini, I. p.316-318.）

アッペル（アペレース）は紀元前４世紀頃のギリシアの画家。アレキサンドロス大王の宮廷画家で偉大であったとされるが、作品は残されていない。プラクシテル（プラクシテレース）は紀元前４世紀半ばのギリシアの彫刻家。リュエルは現在のリュエイユ＝マルメゾン。

エストレ元帥夫人は、原注にあるように特命大使であったエストレ元帥の夫人 Anne Habert。夫のエストレ公爵（Marechal d'Estrée François Annival）は、リシュリューが派遣したローマ大使。ローマ在任は2度目である。エストレの名前は、われわれには、姉のガブリエル・エストレの名の方が親しい。ガブリエルはアンリ4世の美しい愛人であった。その美しさはルーブルにあるフォンテーヌブロー派の作者不詳の二人の貴夫人の入浴図からうかがえる。ガブリエルはアンリ4世とマリー・ド・メディシスの結婚を進めるために毒殺されたと噂された[22]。

強面のエストレ元帥の今回のローマ在任は、時の教皇庁を支配していたバルベリーニ（Barberini）一族に圧力をかけるためであった。エストレ元帥には実績があった。一度目の大使在任中には教皇選挙（コンクラーベ）に圧力をかけてフランスに好意的な教皇を選ばせている。「この人物はパウロ5世の時、ローマ大使を務めていた。いろいろと騒動を起こしていたのだが、教皇が亡くなったとき、グレゴリウス15世が選ばれたのは彼の党派と暴力の賜であった。アダン（Antoine Adam）が要約するエストレ元帥自身の『グレゴリウス15世選出の教皇会議に関する報告』（*Relation du Conclave où fut élu Grégoire XV*）によると、このコンクラーベは二つの陣営、すなわちボルゲーゼ、ファルネーゼ、エステ、メディチのスペイン派とそれより非力なアルドブランディーニ、ウバルディーニ、オルシーニのフランス派に別れていた。最終的にアルドブランディーニが推し、フランスの権益に理解があるとみなされたルドヴィーシ枢機卿が1621年2月10日に選ばれ、グレゴリウス15世となった。Coeuvres 侯（後のエストレ元帥）は難しい争いに勝ったと自慢していた[23]。この（新）教皇は、侯爵が謁見を受けに行ったとき、「卿の仕事をご覧あれ、何をお望みか申されるがよろしい、枢機卿の帽子がお望みか？　わたしの甥と同じ時に差し上げられまし

22）タルマン・デ・レオはアンリ4世の逸話で、「もし Sebastian (*sic*) Zamet が Mme de Beaufort に毒を与えたとすれば、彼はアンリ4世に大いに仕えたと言えるだろう」と述べている。この部分にアダンは次のような注を付している。「Sébastian Zamet は靴屋の息子として生まれたが銀行家として大成し、フォンテーヌブローの管理者となり、そこで Marie de Médicis を迎える。また Arsenal にほど近いスリゼ街に館を建てた。王は時にその館を訪れた。この館で Gabrielle d'Estrée, duchesse de Beaufort が突然病気になり30時間苦しんで1599年4月10日に亡くなる。D'Aubigné は毒殺を示唆している。De Thou, Bassompierre, L'Estoile は言明していない。」*Historiettes*, I. p.3 et p.666.

23）*Historiettes*, I, p.853.

ょう」(*Historiettes*, I, p.166.) とねぎらったが、侯爵は家族の長子であったので断ったという。

このようにもともとpersona non grataになりそうなエストレ元帥であるが、今回のローマ駐在中にも一悶着の中心になっている。エストレ元帥は「王ルイ14世の生誕前ローマの特命大使であり、さらにバルベリーニ一族と大きな喧嘩をするまでその地にいた。」(*Historiettes*, I, p.166.)

一悶着の種は外交特権を利用した違法賭場の開帳である。日本の江戸時代に町奉行が立ち入れなかった大名屋敷の中に賭場が開帳されていたように[24]、教皇のお膝元も大使館は御法度の賭場開帳が黙認されていたようで、ヴォワチュールとエストレ大使との接点の一つは賭博にあったようである。大使自らが賭場を開帳していたわけではなかろうが、治外法権の大使邸に出入りするものの中にはいかがわしい人物も混じっていたようだ。あるいは故意にならず者を飼っておくことで、裏の仕事に使っていたのだろうか。タルマン・デ・レオはバルベリーニ一族との抗争を次のように伝える。1636年には各大使はそれぞれの大使館内で賭場を禁止することに合意した。しかしまもなく賭場は再開されている。元帥はル・ルーヴレ (Le Rouvray) という名の粗暴な御者を雇っていた。この男には賭場を開いているジュリオ・ビアンコーネ (Giulio Biancone) という名の召し使いがいた。賭場の開帳は大使の御者の特権だったのである。この召し使いが何事かしでかし、ガレー船送りになった。ル・ルーヴレとあと一人は、それぞれピストル一丁と剣を持って護送団を襲い、25から30人の警官を追い散らした。勝ち誇ったル・ルーヴレは囚人を皆解放した。これがバルベリーニとの大喧嘩となった。元帥はル・ルーヴレらを田舎に匿うためにヴェネティア部隊のフランス兵8～10人をつけてやった。枢機卿アントニオ・バルベリーニ (Antonio Barberini) はジュリオ・ペッツォーラ (Julio Pezzola) という名の高名なならず者を雇い、ル・ルーヴレがいそうな土地に人を配置した。ル・ルーヴレは護衛の兵無しで狩りに出かけた折りに、捉えられ、その首をバルベリーニ枢機卿にもたらされた。結局事態は元帥がローマを出て、すでに教皇といさかいを起こしていたパルマ公をいっそう激高させ、ロマーニャ平野に

24) 三田村鳶魚によると「大名の大部屋という中間の合宿所に、賭場をこしらえて博打を打ったり、旗本の屋敷でも博打を打つ、というようなことがいくらもあった。これは武家の邸内へは町奉行の手が入らないので、これを奇貨としてやった仕事なのだ。」『武家事典』、昭和33年、青蛙房、p.273.

まで遠征させ、その竜騎兵は立派に略奪をやらせるにまで到る。リシュリュー枢機卿がその行動をあまりよみしなかったので、元帥は長い間パリに戻らなかったが、終いには和平を結んだ[25]。外交特権を不法に利用したエストレ元帥と、ネポティスムで教皇庁を私物化するバルベリーニ一族の抗争はお世辞にも高尚な争いとは言えない。

バルベリーニ一族との喧嘩騒動はヴォワチュールのローマ滞在後の事件であり、ヴォワチュールが直接見聞したはずはないのだが、喧嘩騒動の火種になる賭場には出入りしていたのだろう。ヴォワチュール自身とこのル・ルーヴレと関わりがあったのかどうかは不明だが、賭事に手を出して痛い目にあったのは確かである。ヴォワチュールをカモにしたことが確かな相手は、後のルイ14世の外務卿になるユーグ・ド・リオンヌ (Hugues de Lyonne) である。リオンヌはグルノーブルの法服貴族の家系の出で伯父の Abel Servian の引きで外交畑に入る。マザラン (Mazarin) に評価され1642年には教皇とパルマ公の間を成功裏に仲介する。1654年にはローマ大使、1659には国務大臣。マザランの側でピレネー条約を結ぶ。死に臨んでマザランはこの人物をルイ14世に推薦し、ルイ14世は外務卿の実務を委ねる。1668年から1671年にかけて、イギリスのチャールズ2世、スェーデン、ケルン選帝公と同盟を結んでオランダ連邦を孤立させ、フランドル帰属戦争とオランダ戦争の準備において外交的な巧妙さを示した。ヴォワチュールは帰国後の1639年2月7日、リオンヌにあててローマでのつきあいを恨みがましく感謝する。

> 今回の旅行中あなたがわたしにとって最悪の時を与えてくださり、またローマではあなたほどわたしをひどく扱いはしなかったにも拘わらず、わたしがもう一度お目にかかりたいと思い、喜んで仕える人にはあってはいないとあなたに断言いたします。人を破産させながらその友情を獲得することはほんの稀にしか起こりません。しかし、あなたはわたしとそういった幸運をお持ちになったのです。そしてあなたの霊はあらゆる点においてわたしの中では非常に力強いのでどのようにしてもあなたから身を護ることができないのです。そしてわたしから金を巻き上げながら、わたしの心まで奪ってしまわれ、わたしの意志の主になってしまわれたのです。もしわたしがあなたの意志の中にいくばくかの場所を得るほど幸せであったな

25) *Historiettes*, I, p.168-169.参照。

らば、この勝利でわたしのすべての損失を埋め合わせることになり、われわれの交流の中で得たものはわたしの方があなたよりも多いと考えますでしょう。わたしはあなたの知遇を得るのに高く払ったとはいえ、その価から遠く離れた支払いをしたとは思っておりません。また、パリでもあなたのような他の人を見つけるためには、さらに同じくらい払うことでしょう。こんな訳ですから、わたしがこれほどの高く評価する名誉を保てるためのすべてを常になすであろうと、またこれほど高くついた友人をやすやすと失いはしないだろう、とご安心なさいますように。お申し越しの件であなたがお望みのすべてをやりました、今後お命じになるあらゆる事柄でもあなたには同様に従う所存です。というのは云々。」(Ubicini, I. p.321-322.)

「(わたしから金を巻き上げるという不当な扱い) にもかかわらず」あるいは「だからこそ」あなたはいっそう貴重な人なのです、と述べるレトリックはヴォワチュールの得意とするものである。シャプランも1639年2月16日付のこの人物にあてた手紙がある。シャプランも旧知のこの人物に挨拶を伝えてくれるように依頼したのに、ヴォワチュールが従わなかったのだろう、シャプランの書簡中では「ヴォワチュールのあなたへの感謝の気持ちも伝えてくれるように頼んだのですが断られました」(Chapelain, p.386.) と述べる。

ヴォワチュールのローマからの手紙の中ではもう二人の名が挙げられる。ジャール騎士、François de Rochechouart, chevalier de Jars (1595-1670) は1630年11月10日の La journée des Dupes の後イギリスに亡命。1631年にフランスに戻って、Chevereuse 公爵夫人、Chateauneuf 侯爵と反リシュリューの陰謀をめぐらす。1633年2月に陰謀が発覚し、死刑を宣告されるが、死刑台上で終身刑に減刑され、バスティーユに収監される。1637年の夏、アンヌ・ドートリッシュがスペインと通信していることが発覚し、アンヌ・ドートリッシュの裾持ちで伝達係 Pierre de La Porte もバスティーユに収監された際、バスティーユの中で特権的な自由を享受していた Jars は La Porte に王妃からのメッセージを伝達し、口裏合わせに協力する[26]。

Nerli については Ubicini の原注以上のことは不詳。

アンチモンについて若干述べる。アンチモンは Furetière によると「汎用薬として使えると思われていた。というのは最も多くの病気の最も多くの薬品に使われていたからである。その第一の効能は吐き気を催させ、また、戻すもしく

26) Bertières, p.339-340.

は下すことで浄化することである。様々な処方があり、それを医者は催吐剤と呼んでいる。これを溶解させた白ワインも嘔吐を引き起こすので同様の名前で呼ばれる。ローマ人はこれを stibium とよび、ギリシア人は stimmi とよんだ。」Furetière にとっても服用薬として使うことは過去のことになっていたのだろう。Richelet は Voiture の記述自身を用例の根拠としてあげているが、「硫黄と水銀の混合物。金を純化する鉱物。体を浄化するために処方する鉱物。」という定義を与えている。もちろん砒素に近い元素であり有毒。元素番号51で、元素記号 Sb は Furtiere の記述にあるラテン語の stibium からきている。いかに瀉血か吐瀉が医療の主要な手段だったとしても有毒物質を吐剤として常用する医療はモリエールに批判されても仕方がない。

エギヨン夫人の名はトリノからの手紙の中でも薬品と関連させて引かれる。ヴォワチュールと同様な体調だったのだろうが、詳細は不明。

エストレ元帥と敵対するバルベリーニ枢機卿自身や、その伯父の教皇ウルバヌス8世にも、ランブイエ邸の古いなじみであるリジユー司教(Lisieux)[27]の紹介で会っている。ヴォワチュール帰国後の1月13日付けの手紙でローマでのバルベリーニの様子を伝え、伝言を直接面談した機会に述べようと書き送る。

> 猊下、この手紙と共にある手紙を持参し、またわたし自身から、あなたが（手紙を）送られた方にわたしをご推薦いただくというあなたがお示しくださったご恩に感謝したいところであります。またローマで善行の人と

27) Philippe Cospeau もしくは Cospean, Lisieux 司教。ランブイエ邸の古くからのなじみである。ランブイエ夫人がこの人物をかついだことがある。「リジューの司教で詩人のフィリップ・コポーが夫人に敬意を表しに来ることになった。（中略）夫人は司教を案内して草地の方へ散策に出かけた。木の間から岩山が見えてきたが、岩のそちこちに輝かしいものがチラチラしていることに司教は気づいた。夫人はそしらぬ顔で話しながら歩いている。近づくにつれて、それは女の人たちであるとわかった。さらに近づくとニンフの姿になった。到着するとそこにはランブイエ嬢や令嬢たち次女たちが羽衣のような透け透けの衣裳で、しどけなく憩うている。（中略）よほど思いがけない喜びであったと見えて、その後会う人ごとに「ランブイエの岩山の天女たち」の話を吹聴していた。」（川田靖子、p.93-94.）

より詳細には、*Historiettes*, I, p.444-445. なお、このエピソードはヴォワチュールが1627年3月8日の書簡で言及しており、それより以前の出来事だと知れる。コポーがリジユーの司教になったのは1635年なので、それ以降はリジユー氏と呼ばれたが、このエピソードの時期にはまだリジユー司教ではない。

なったわけではないのですが、リジユーではそれ以上に進歩するのかどうか、わたしが教皇からいただいた赦免をわたしが得るようにしかるべきあなたがわたしを教え諭してくださるかどうかみてみたいと思っております。(中略)あなたの推薦に対してバルベリーニ枢機卿がわたしにしてくださった歓迎や、あなたに関わるすべてに対して枢機卿が抱いていると示された愛情を十分にうまく表現することができません。イタリアはフランスよりあなたを知らない、ということはありません。そして本当にローマでは、あなたに対して彼の地で抱かれている尊敬や情熱ほどわたしを教化したものはありません。しかし他のすべての人の中でも、バルベリーニ枢機卿は完璧にあなたのお友だちであり、[あなたの精神に対して]またあなたの徳に対して、あなたとつきあいのあるすべての心の中にあなたが投げ込まれるあの情愛と尊敬をお持ちのように思えました。いくつかの特別なことがらについてあなたにお聞かせするように、とのご命令でしたが、申し上げるのは、あなたにお目にかかれて、わたし自身が誰にもましてあなたの云々(Ubicini, I. p.319-321.)

またバルベリーニ枢機卿の周囲にいたパリ出身のブッシャール(Jean Jacques Bouchard)という聖職者にも会っている。アンシャン=レジームの高位聖職者は宗教的情熱で高位についたわけではない。ウルバヌス8世も甥のアントニオを枢機卿に取り立てており、まさにネポティスタである。バルベリーニ枢機卿もエストレ元帥とマフィアのような抗争を繰り広げている。そういったバルベリーニに引き立てられたブッシャールも問題のありそうな人物である。タルマン・デ・レオによると、ブッシャールには異父兄があって8,000フランの実入りのある修道院を持っていた。ブッシャールはその実入りを手に入れたくて薬剤師である父に兄をゆっくりとした毒で殺すように進言した、という話を伝えている。またローマではバルベリーニ枢機卿に気に入られて取り立てられた。イタリア内の司教座を買い叩いていた。長らく待ち望んでいた司教座を得たころ、エストレ元帥とバルベリーニのいさかいに際して元帥に反する発言をし、襲われ、それがもとで1641年8月26日亡くなる。

ブッシャールはまたAcademia degli humoristiという組織の一員でもあった。Academia degli umoristiは ペリッソン(Paul Pellisson)によると、パウロ・マンチーニという人物によって「甘い朝露の宿り」を銘とするアカデミー。パウロ兄弟のロレンゾ・マンチーニの婚礼の場で、会食者たちが、ソネットや喜劇や演説を朗読し始め、その様子が彼らにbelli humori(ひょうきんな)

という名を与えた。彼らはこの経験が気に入り、文芸アカデミーを創ることにする。その際、belli humori を humorisiti に改めた[28]。そのブッシャールの引きで、ヴォワチュールもこのアカデミーに迎えられている。ヴォワチュールはブッシャールについては全く言及しないのだが、アカデミーに対しては帰国後、礼状を書いたらしい。もっともラテン語で書く必要もあってラテン語の得意なコスタールに代筆を依頼している。

拝啓　アルプスの向こう側でのわたしのあることがらについてお助けいただくようにお願いし、またローマ人に対してあなたの救いを哀願すると非常に驚かれますでしょう。ご存じの通り、彼らに何も要求しない人々の平安を彼らが乱すのはこれが最初ではありません。しかし彼らは誰に対しても、わたしに対してそうであるほどには不当ではなかったように思われます。またあなたがわたしを助けてくださらなければ、彼らはハンニバルにさえ、わたしに与えようとしているほどの苦痛は与えはしなかったことになりましょう。Quorsum haec?(これはいかなる方向に)。これから申し上げます。彼らの内に Humoristes、ほぼ奇妙なというような意味ですが、と呼ばれる人々のアカデミーがあります。実際かれらはその通りでして、わたしを彼らの仲間に受け入れ、その一人がわたしに寄こした手紙によってそのことを知らせせしめるという気まぐれを抱くほどでした。わたしも謝意を表するために一通、しかもラテン語でものしなければなりません。それがわたしを非常に苦しめているというわけです。でもあなたのことを思いついて苦しみから解き放たれました。というのはまさにあなたの領分なのであり、ポワトゥー地方にあって心より楽しくラテン語で手紙を書かれる方がこれを断られるはずがない、と思われるからです。かれらは海の蒸気を吸い上げ雨として降らせる太陽とリュクレティウスの Fluit agmine dulci(「流れは穏やかにして流れる」)ということばを紋章としています。どうぞもしあなたがこの点に対して、また彼らがわたしに与えた栄誉に対して、そしてわたしが価するほんの少しのことに対して言うべき何かを見つけられますかどうかご覧ください。結局、あなたがお出来になる最善を尽くしてくださいますように。(Ubicini, II, p.98-99., *Entretiens*, p. 125-126.)[29]

---

28) Pellisson, *Histoire de l'Académie française,* I., cité par Littré, humoriste の項。

アルプスを越えてガリアの平和を乱したカエサルのローマと、ヴォワチュールにラテン語の手紙を寄こすhumoristesたちのローマを結びつけてコスタールの古代趣味をくすぐる。ハンニバルの名が引かれるのはエストレ元帥の名がハンニバルだったことからの類推だろうか。

さてブッシャールはパリにできたアカデミー・フランセーズへの興味も津々であったようである。シャプランはヴォワチュールによるブッシャール評はアカデミーへの受理演説にまさるほどの賞賛であったと述べる。もっとも同じ書簡の後半では、ヴォワチュールはil Negligente（無頓着もの）とあだ名されるように、アカデミーに対しては無関心で、そういったヴォワチュールにアカデミーの様子を尋ねるのは無意味だ、と書き送っている。

> (ヴォワチュール)氏によるあなたの優れた点についての立派な報告には満足なさったでしょうし、同氏によるあなたに対する称賛をアカデミー・フランセーズ全員によるあなたの受理演説以上に評価なさるでしょう。というのは、同氏はわれわれの間には並ぶ者のなく、同氏を満足させるためには物事は完璧でなければならないような心の繊細さをお持ちなのですから。同氏は称賛については貪欲で並の人の称賛を悪くとることさえあると、うらやましく思うことなく気付くのです。同氏があらゆる点においてあなたについて述べた良い点は、あなたの評価の断言としての称号の地位を占め、今後同氏のことばにおいてはあなたは常に良い評価をお持ちになり、といって虚栄にとどまるというわけでもないはずです。(中略)
>
> ヴォワチュール氏のアカデミーの中での名前はil Negligente（怠慢な、無頓着な)、あるいはよろしければil Trascurato(ぞんざいな、不注意な)なのです。同氏ほどアカデミーに出席することの少ない者はおりません。ですからあなたのHumoristesのアカデミーは、同氏がローマにいた3日間にわれわれが4年の間にわれわれが見た以上に同氏を見たということは自慢して良いことなのです。こんなことを申し上げるのは、アカデミー・フランセーズについてのニュースと、そこでどんなことがなされているかを知るために、あなたが間違った人にたずねられたことをご覧に入れようとのことです。あなたがお話になっている人物は、辞書を作ったり長広舌

29) Ubiciniはこの書簡を1640年8月付けとする。確かに*Entretiens*での配列を踏襲すれば、1639年の夏以降の日付ではあるが、ローマ滞在1年半以上後というのはいささか間遠くないか。

を振るったりすべきではないと言うべきであり、また自らの例によって、これらの仕事のどれも引き受けるべきではないと示すべき第一の人たちの一人です。(Chapelain, p.354-359.)

フランス国内の実入りの良い司教区を狙っていた人物だから、ローマでヴォワチュールを世話した代償にパリで文化的な名誉にもありつける足がかりとして、アカデミー・フランセーズのメンバーであるヴォワチュールに近付いたか。マーニュ(Emile Magne)はヴォワチュールがhumoristiに加えられたのは「田舎で馬車がひっくり返ってスカートが捲れ上がったご婦人へのスタンス」のおかげだといっている[30]。タルマン・デ・レオはブッシャールの項をこの人物が「大bugiarronとの評判であった」と評している。bugiarronは「嘘つき」の意だが、アダンは「男色、肛門性愛者」の意味を示唆している[31]。「田舎で馬車がひっくり返ってスカートが捲れ上がったご婦人へのスタンス」のテーマがお尻であったことは偶然だろうか。

ヴォワチュールは言及していないがシャプランは、書簡の中でレッス修道院長(Jean-Francois-Paul de Gondi, abbé de Retz)の名を引いている。後の枢機卿でフロンドの中心人物もこの時期イタリアを旅行し、年末にはローマに辿り着いている。さらにこの年18歳のタルマン・デ・レオもレッス修道院長に従ってローマに滞在していて[32]、ヴォワチュールと交友を持っていた。タルマン・デ・レオをローマからの帰還後ランブイエ邸に紹介したのはヴォワチュールで

30) Magne, p.140.ただマーニュが根拠として上げるシャプランの書簡の中には特に言及はない。Chapelain, p.354.参照。他にMagne, p.40. note 1では、Meynardの1653年の書簡を引用してこのスタンスがイタリア人の間で好評だったとしている。Meynardの書簡の拙訳を示す。「わたしはもうヴォワチュール氏の詩を見ました、それが評価されていることを疑いはしません。機知とひらめきに満ちており、この作品の中でAubry嬢(ママ)のお尻を見ると、もしこの場に氏がいれば、幸運にもそちらに駆け寄っただろうと思います。イタリア人は体の後部を讃えるためにフランス人がその筆を使ったことに感じ入っています。そしてこの小頌歌は彼らの間に大人気で、作者の肖像をわたしに望んだものもいるほどです。」

なお、この歌の拙訳は拙論「ヴォワチュールの詩の猥雑さとパロディ」にある。

31) *Historiettes*, II, p.760-761., p.1507-8. note de Adam参照。またContes d'italiens sodomitesの項、*Historiettes*, II, p.739.参照。

32) *Historiettes*,II, Retzの項、p.308-312.

あったと考えられる[33]。1638年の秋のローマはなかなか多士済々であったわけだ。

船　　旅

先に引いた11月15日付の書簡で、帰りは寄り道をせず船便をとることをコスタールに告げている。

> 3週間後にはローマを出発したいと思っています。もしうまく船を見つけられればマルセイユに向けて出帆いたします。風についてはよくご存じのあなたですから、もし風に対していくらかの影響力をお持ちでしたら、それらをみんなしばらくの間どこかに閉じこめていてください。」(Ubicini, p.90., *Entretiens*, p.86.)

シャプランもヴォワチュールの船旅について1639年2月23日バルザックに報告する。

> ヴォワチュール氏の旅はマルセイユへ直通のガレー船によりましたので、同氏はフィレンツェから戻るのにトリノは経由されませんでした。(Chapelain, p.395.)

マーニュによれば39年1月1日にはパリに帰着している。

おわりに

ヴァレンティーノ宮に関する書簡に惹かれて1638年9月から1639年初にかけてのヴォワチュールの足跡を追ってみた。この時期は、後にヴォワチュール擁護の論陣を張るコスタールがヴォワチュールと親好を深め始めた時期である。そのギリシア語ラテン語の知識でヴォワチュールをいささか辟易させる文通の様子が窺える。

また、シャプランやバルザックなどの文壇の重要人物との関わりも興味深い。今回は触れなかったのだが、シャプランは餞としてヴォワチュールにアリオス

---

33) *Historiettes*, I, Introduction par Adam, p.IX-X.参照。

トの『取り違え』(*I suppositi*) という作品を託し、帰国後に評価を聞かせるように依頼している。帰国後ヴォワチュールとシャプランの美意識の差が新たな論争を引き起こすことになる。批判的な筆致でヴォワチュールの様子をバルザックに伝えるシャプランの書簡は、単に補助資料としてではなく、シャプランの人となりを伝える作品として興味深い。

また後にヴォワチュールの書簡に注を付し、*Historiettes* で17世紀前半のパリの人士の息づかいを伝えてくれるタルマン・デ・レオもこの旅でヴォワチュールに出会い、ランブイエ邸への紹介者を得た。

書　　誌

Chronique de la France et des Français, Paris, Larousse, 1987.

Adam (Antoine), *Histoire de la littérature Française au XVII*[e] *Siècle*, 5 vol., Paris, del Duca, 1962.

Balzac (Jean-Louis Guez de), *Œuvres*, publiées par Valentin Conrart, 2 vol., Paris, Louis Billaine, 1665. (réimpression par Slatkine, 1972.)

Bertière (Simone), *Les Reines de France au temps des Bourbons, tome* 1. *Les deux régentes, Marie de Médicis, Anne d'Autriche,* Paris, Fallois, 2000 copyright 1996, 2.253145297.

Chapelain (Jean), *Lettre de Jean Chapelain de l'Académie française,* publiées par Ph. Tmizey de Larroque. correspondant de l'Institut et du Ministère de l'Instruction publique. tome premier, septembre 1632-décembre 1640, Paris, Imprimerie Nationale, 1880, (réimpression par offset Josephe Floch, 1968.)

La Fontaine (Jean de), *Fables. contes et nouvelles, Œuvres complètes.* tome 1, édition établie, présentée et annotée par Jean-Pierre Collinet, Nouvelle édition, Paris, Gallimard (pléiade), 1991, 2.070112024.

Magne (Emile), *Voiture et l'Hôtel de Rambouillet, les années de gloire (1635-1648)*, Paris, Emile-Paul Frères, 1930 (Nouvelle édition).

Picard (Roger), *Les salons littéraire et la société française 1610-1789.,* New York, Brentano's, 1943.

Tallemant des Réaux (Gédéon), *Historiettes,* 2 vols. édition établie et annotée par Antoine Adam, Paris, Gallimard (Pléiade), 1980 (*Historiettes* と略記)

Tallemant des Réaux (Gédéon), *Les Historiettes de Tallemant des Réaux,* édition documentaire établie par Georges Mongrédien, 8 vol., Paris, Garnier, 1932.

Voiture (Vincent) et Costar (Pierre de), *Les entretiens de M. de voiture et M de Costar,* Paris, Augustin Courbé, 1655. (réimpression par Slatkine, 1972.)

Voiture (Vincent) (éclaircissements et notes par M. A. Ubicini), *Œuvres de Voiture,* 2 vols. Lettres et Poésies, nouvelle édition revue en partie sur le manuscrit de Conrart, corrigée et augmentée de lettres et pièces inédites, avec le Commentaire de Tallemant des Réaux, des éclaircissements et des notes par M. A. Ubicini, Paris, 1855. (réimpréssion par Slatkine, 1967.) (Ubicini と略記)

『世界文学大事典』、集英社、1997年

岩倉・清水・西本・米川、『イタリア文学史』、東京大学出版会、1985年

オウィディウス、中村善也訳、『変身物語』、岩波文庫、1981年

川田靖子、『十七世紀フランスのサロン』、大修館書店、1990年

田島俊郎、「ヴォワチュールとタルマン・デ・レオによるサン・マール事件」、『言語文化研究　徳島大学総合科学部』第6巻、1999年

田島俊郎、「ヴォワチュールの詩の猥褻さとパロディ」、『言語文化研究　徳島大学総合科学部』第5巻、1998年

田島俊郎、「ヴォワチュールのスペインアフリカ旅行」、『徳島大学教養部紀要(外国語・外国文学)』第1巻、1990年

プリニウス、中野定雄訳、『プリニウスの博物誌』第1巻、雄山閣出版社、1995年（第5版）

三田村鳶魚、『武家事典』、昭和33年、青蛙房